

元雜劇テキスト改変にみる明代文人の妓女観

福 永 美 佳

一 はじめに

これまでに確認されている元雜劇版本は、『元刊雜劇三十種』を除き、すべて明代以降に成立したものである。しかし、同じ作品であるにもかかわらず、版本間で内容が大きく異なることも珍しくない。異同が生じる理由の一つに、編纂者によるテキストの改変が挙げられる。こうした改変はテキストのどこにみられ、何を意味するのだろうか。

本稿では、明代に成立した元雜劇版本のなかでも、テキストを多く収めることで知られる臧懋循編『元曲選』を中心とし、それ以外に新安徐氏刊とされる『古名家雜劇』（以下、古名家本と記す）、顧曲齋刊『顧曲齋古雜劇』（以下、顧曲齋本と記す）、孟称舜編刊『古今名劇合選』（以下、孟称舜本と記す）の四つの版本を対象に、「謝天香」「金線池」「救風塵」の三作を取り上げ、異同を示すことをとおして、明末の文人の

間でどのような妓女像が共有されていたかを明らかにする。

二 テキストの改変について

現在、元雜劇研究でもっとも活用されている版本は、『元曲選』である。吉川幸次郎は、その理由について、収録された作品の多さ、版式の良さ、内容の読みやすさの三点を挙げ、その一方で、『元曲選』が抱える問題についても言及し、選択の当否、字句の改作の二点を指摘する¹⁾。つまり、『元曲選』と、他の元雜劇選集との間には、大きな違いが生じているのである。

それでは『元曲選』はなぜ改変されたのだろうか。その理由について、小松謙は、以下のようにまとめている²⁾。

その異同のあり方は、大部分臧晋叔による改変の形跡がはっきりと認められるものである。即ち、曲律に合わせる方向への改変、内容・文言の合理化、実演上は必要であったと思われる煩瑣な部分の削除、『雍熙樂府』等の曲選に基づく古型と思われる方向への復原、それに後述する尾声の追加の如き套数の規則に合わせることを目的とした曲牌の追加などである。そしてその改変は、ある程度まとまった形で看取されることが多い。つまり改変はある程度集中的に施されており、施す必要が少ない部分においては、法的に改変される部分、即ち先にふれた取り次ぎの省略の如き煩瑣な箇所は削除を除けば、あまり異同が認められないのが常である。

これによると、『元曲選』では、さまざまな理由によってテキストの改変が行われていることになる。では、ここに挙げられた以外の要因はないのか、あるとすればどのようなに改変されているのだろうか。そこで注目したいのが、女性の描かれ方である。

そもそも元雜劇は、文人官僚らが主体となって形成されたものではなく、老若男女を問わず、さまざまな人々が関わって出来上がった庶民による演劇である。それゆえ、ここには庶民の感覚が十分に織り込まれていると考えられる。なかでも、当時役者も兼ねていた妓女が元雜劇にいかなる影響を及ぼしたかについては考慮に値すると思われる。

女性描写に関して、高い評価を受けている元雜劇作家といえは、関漢卿であろう。関漢卿作品には、貴賤や未婚既婚を問わず、さまざまな背景を持つヒロインが登場するが、とくに妓女が多く取り上げられる。「謝天香」「金錢池」「救風塵」がそれである。テキストの所在を示せば、次のとおりである。

「謝天香」 古名家本、『元曲選』

「金錢池」 古名家本、顧曲齋本、『元曲選』、孟称

舜本

「救風塵」 古名家本、『元曲選』

版本の成立した順序にしたがうと、古名家本、顧曲齋本、『元曲選』、孟称舜本の順となる。複数の元雜劇選集に収載されていることから、取り上げる三

つの作品がいずれも、明代でも人気のあったことがうかがいしれる。そのうえ、三作がともに『元曲選』のほか、古名家本に収録されている点も興味深い。古名家本とは、どのようなものなのだろうか。

佐藤晴彦は、元代から明代になるに及んで表記法が変わった「哩」、「慌」、「教」、「原来」を中心に、各表記法の使用頻度によって古い要素を残す版本がどれかを検討した際に、古名家本について、その刊行は万暦よりさらにさかのぼること、或いは仮に万暦の刊行だとすれば、そのベースとなった版本がかなり古いものを残しており、それにあまり手が加えられなかった、という二つの可能性を指摘している³。つまり、成立という点のみならず、言語学的にみて、古名家本は、『元曲選』以前の古い部分を残す版本であり、『元曲選』との比較に適しているといえる。以上のことをふまえて、異同について考察したい。

三 異同にみる妓女像の違い

一つ目に取り上げる「謝天香」は、北宋の詞人柳永と妓女謝天香の話である。柳永が遊里に親しんだ

という話は有名だが、この劇でも柳永は学問ではなく、謝天香に夢中になる。それにより、銭大尹によって二人は引き離される。柳永が試験のために旅立った後、謝天香は銭大尹に引き取られるが、相手にされない日々が続く。だが、ある日、銭大尹が謝天香を正式に迎えると言いだす。納得できない謝天香は、銭大尹に対して、第三折で次のように述べる。以下、古名家本は（古）、『元曲選』は（元）と表記する。

（古）【一煞】不想今朝相公錯愛我才藝、可憐見我哭啼。

図らずも今になって旦那様が私の才と芸とを愛されて、私が泣くのを憐れんだ。

（元）【一煞】不想道今朝錯愛我這匪妓、也則是可憐見哭啼啼。

図らずも今になって私という妓女を愛されて、私が泣くのを憐れんだ。

ここでは錢大尹に氣に入られた理由として、古名家本では才芸評価と泣くことへの同情を挙げるが、『元曲選』では同情のみを挙げる。これは妓女に対する評価の相違と捉えることができる。

二つに目に取り上げる「金線池」にも、妓女を評価する発言がある。この劇では妓女杜蕊娘と書生韓輔臣が夫婦になることを望む。だが、妓楼を取り仕切る母親が韓輔臣にはすでになじみの妓女がいると杜蕊娘に対して嘘をつく。韓輔臣が科挙に及第し、彼女のもとを訪れても、杜蕊娘の誤解は解けず、韓輔臣に対して第三折で次のように述べる。以下、顧曲齋本を（顧）、孟称舜本を（孟）と表記する。

（古）【耍孩兒】我立的其身正、倚仗着我潑天似名姓、愁甚麼錦片也似前程。

（顧）【耍孩兒】我立的其身正、倚仗着我潑天似名姓、愁甚麼錦片也似前程。

私がその身を正しくし、天に届くほどの名前に頼

れば、錦にも似た前途を愁うることはありません。

（元）【耍孩兒】我立的其身正、倚仗着我花枝般模樣、愁甚麼錦片也似前程。

（孟）【耍孩兒】我立的其身正、倚仗着我花枝般模樣、愁甚麼錦片也似前程。

私がその身を正しくし、花の枝のごとき容貌に頼れば、錦にも似た前途を愁うることはありません。

歌詞を見ると、古名家本と顧曲齋本とが一致し、『元曲選』と孟称舜本とが一致する。いずれも杜蕊娘が韓輔臣に見切りをつけるという内容ではあるが、前者では名前に頼ると言うのに対し、後者では美しい容貌に頼ると述べる。ここも、版本間で妓女に対する見方が異なる部分といえる。

三つ目に取り上げる「救風塵」にも、妓女の評価に関わる違いがある。妓女の宋引章は、正旦趙盼兒の忠告を聞かず、貧乏書生の安秀実との婚約を反故にし、知事の息子の周舍との縁談を決める。困って

相談に訪れた書生に対し、第一折で趙盼児が次のように論ず。

(古)【鵲踏枝】俺説是賣虛脾、他可得逞狂為。一個個敗壞人倫、不辨賢愚、出来一個個綽皮。

私は見せかけの愛情を売るとはいえど、彼は乱行や悪事をほしきままにする。誰も彼も人倫を損ない、賢愚をわきまえず、みな誰も彼もごろつき。

(元)【鵲踏枝】俺不是賣查梨、他可也逞刀錐。一個個敗壞人倫、喬做胡爲。

私は偽の梨を売った(客を騙した)わけではないのに、客は細かくけちをつける。誰も彼も人倫にもとり、でたらめをする。

古名家本では妓女と客の双方が騙し合うものと述べるのに対し、『元曲選』では客が一方的に悪人とされる。実際の遊里において、甘い言葉や巧みな演技は

非難されるものではないはずである。そのように考えてこそ劇の終盤の第四折において「【慶東原】俺須是賣空虚、憑着那説来了言咒誓為活路」(うちらはうそを売るのが仕事、口にした誓いの言葉をたよるが生きる道)と言う趙盼児の発言が活きてくるだろう⁴。つまり、古名家本には現場主義的な考え方を有す妓女が描かれているのである。これに対し、『元曲選』は、美しい容貌を殊更に強調し、妓女を美化する傾向にあるといえる。こうした相違が、なぜ生じたのだろうか。

古名家本の描写と似たような妓女の話は、實在の妓女に関する記録にもみえる。例えば、唐の『教坊記』には、妓女龐三娘が若い頃から歌舞に巧みで、年取ってから名前によって出演を求められると、厚化粧で飾り立て、教坊では「にせ金を売る悪党」の異名を取ったと記されている。現実の妓女は、仮母のもとで幼い頃から訓練を積み、客を引き付ける術を学習した。妓女にとって、客受けと座持ちの良さは死活問題であり、容貌と同様に「才芸」や「名姓」が大事だとみなされていたのである。このことから考

えると、古名家本にみえる妓女像は、現実の妓女像に近いといえる。

では、なぜ関漢卿作品には妓女のありのままの姿が描かれているのか。先ほども述べたように、妓女は当時俳優でもあったため、劇作家と接点をもつことが比較的容易であったと思われる。しかも、関漢卿作品には、雜劇以外に、「**南呂**」一枝花 贈朱簾秀、「**南呂**」一枝花 不伏老などの散曲も伝わっており、ここにおいて関漢卿は妓女と親しみ、妓楼に精通したベテランだと自負する。関漢卿にとって妓女が身近な存在であり、接触する機会も多かった。そのために、現実の妓女の生き方と、舞台上での妓女の考え方が一致したとしても不思議ではない。

ところが、『元曲選』は、この点を書きかえている。なぜだろうか。その理由を考えるために、再度「救風塵」の中から、第三折「**小梁州**」で、趙盼児が仲間をかばっていった次の発言に注目したい。

(古)【**小梁州**】你可便息怒停嗔、你村時節背地里使些村、對着我合思付、那一个双同叔打殺麒麟。

あなたは怒りを鎮めて、あなたは野暮なことをする時にはこっそりと野暮なことをし、私に向かう時には付度してちょうだい、どこに麒麟を打ち殺す双通叔がいるかしら。

(元)【**小梁州**】你可便息怒停嗔、你村時節背地里使些村、對着我合思付、那一个雙同叔打殺俏紅裙。

あなたは怒りを鎮めて、あなたは野暮なことをする時にはこっそりと野暮なことをし、私に向かう時には付度してちょうだい、どこに粹な妓女を打ち殺す双通叔がいるかしら。

ここで注目したいのは、妓女趙盼児が同じく妓女である宋引章のことを何に喩えているかという点である。古名家本では「麒麟」と呼んでいるが、『元曲選』では「俏紅裙」と呼んでいる。一般に「麒麟」が指すのは、例えば石君宝作「秋胡戲妻」の秋胡や、費唐臣作「貶黃州」の蘇軾のように、傑出した人で

ある場合が多い。したがって『元曲選』の「救風塵」は妓女を「麒麟」に喩えることの違和感から、当たり障りのない「俏紅裙」へ改めたのではないかと考えられる。

ここからいえることは、古名家本と『元曲選』とは、妓女に対する位置づけが異なるという点である。『元曲選』は、明末の文人臧懋循によって文人向けに編纂されたレーゼドラマである。それゆえ、古名家本では問題なくとも、『元曲選』では妓女を「麒麟」になぞらえることが受け入れられなかったのであろう。つまり、『元曲選』におけるテキストの改変は、受容層である明代文人の嗜好を強く反映させた形で成立していると考えられるのである。これに対し、古名家本の「救風塵」は、妓女との心理的距離が近い人々が受容層として想定されるのである。

今回の考察から、古名家本に収める作品は単に刊行年が早いというのではなく、古い内容を残したまま伝わった作品があると考えられる。その一方、『元曲選』は、文人層を対象にレーゼドラマとして成立したため、彼らの嗜好を無視することができなかった

たのであろう。その一つが女性に対する評価という目に見える形で現れたのである。魅力的な女性の在り方は一つではない。少なくとも、美しい女性を誇張して描くのが『元曲選』の特徴であり、その他の要素を魅力とみなす古名家本とは異なるのである。

四 おわりに

本稿は、『元曲選』収載の「謝天香」「金線池」「救風塵」と、古名家本・顧曲齋本・孟称舜本に収められる同じ作品とを比較し、テキストの異同と、妓女像の違いについて明らかにすることをとおして、明代文人の妓女に対する見方を論じている。

まず「謝天香」を取り上げ、妓女が愛された理由について、古名家本では才芸と同情を挙げるのに対し、『元曲選』では才芸の部分が削除され、同情のみを挙げると指摘した。次に「金線池」を取り上げ、妓女が自分の売りについて、古名家本・顧曲齋本では評判を挙げるのに対し、『元曲選』・孟本では美しい容貌を挙げると述べた。さらに「救風塵」を取り上げ、妓女と客の関係性について、古名家本では男

女の駆け引きに触れるが、『元曲選』では妓女を一方的な被害者すると論じた。

これらに共通しているのは、『元曲選』では、芸能の技量、評判、男女の駆け引きといった妓女として生きる強さを印象付ける部分が削除され、美しく誠実な妓女像へと改められているということである。これは妓女に対する評価が版本間で異なることの表れである。また『元曲選』収載の「救風塵」における妓女を喻える表現として、古名家本にある「麒麟」ではなく「俏紅裙」という語句が使用されていることも、妓女評価の変化を示す明らかな例といえる。『元曲選』が明代文人に向け編纂されたことがこのような改変へとつながったのであり、魅力的な妓女像というものが、時代や受容層に応じて変化するなかで、明末文人にとって魅力的な妓女像とは『元曲選』にみえるようなものであったといえる。

注

- 1 吉川幸次郎『元雜劇研究』序説（『吉川幸次郎全集』第二四卷、筑摩書房、一九六八年）四「元雜劇の

史料」、三三―五四頁参照。

- 2 小松謙『中国古典演劇研究』Ⅱ「明代における元雜劇——読曲用テキスト成長の過程」（汲古書院、二〇〇二年）二〇八頁の記述。

- 3 佐藤晴彦『脈望館鈔校本古今雜劇』新探」（『神戶外大論叢』第四九巻第四号、一九九八年所収）。

- 4 ここは古名家本を引用した。なお『元曲選』は「【慶東原】俺須是賣空虚、憑着那説來的言咒誓爲活路」とあり、ほぼ同じ内容である。